

限界に暮らす

集落の今

①

秋田県南部の由利本庄市の市街地から車で約40分、標高約2500

の高山にある集落「三ツ方森」。江戸時代、三つの藩の境界にあり、監視役らが住み

着いて生まれた約300年の歴史を持つ集落だ。

「近い将来、長い歴史は途絶えたと諦めていた」。町内会長の猪股さん(64)は言う。

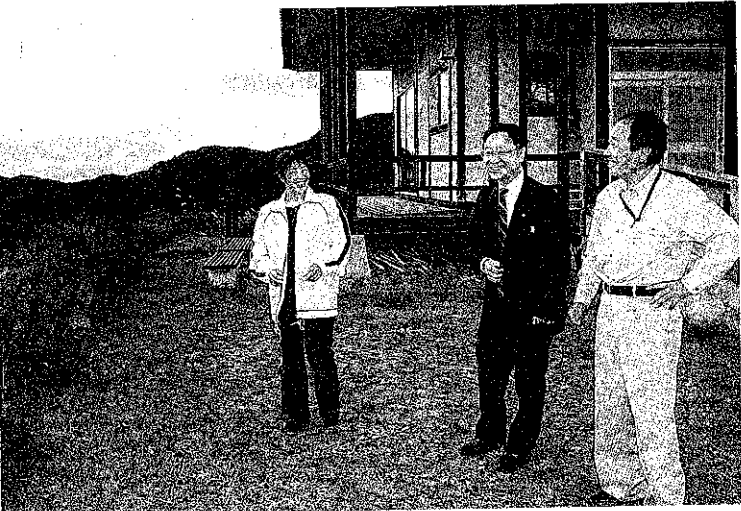
5世帯10人中8人が65歳以上。主に稲作を営み、30年前には40人以上が暮らしたが、若者は次々と都市部へ移り住み消滅の危機にひん

きた」と猪股さんの表情も明るい。2千人戸別訪問 同県の人口は1956年の135万人をピークに減少し、現在は106万人。65歳以上の割合を示す高齢化率は全国一の30%で、65歳以上の30~40%が集落に住むとされる。県は「高齢化が進む地域を維持するには、まず集落の活性化が不可欠」とし、2009年、県庁に担当課を設置し、市内全25市町村とも

「優先的に支援が必要」とみる52集落の全約千戸を対象に、後継者の有無や生活の不安などを調査。県と市町村職員ら延べ2千人が各戸を歩いて聴き取り、各集落で住民座談会を開いて今後の課題や対策を話し合った。

などの基準をもとに「優先的に支援が必要」とみる52集落の全約千戸を対象に、後継者の有無や生活の不安などを調査。県と市町村職員ら延べ2千人が各戸を歩いて聴き取り、各集落で住民座談会を開いて今後の課題や対策を話し合った。

立て直す



三ツ方森の集会所前で猪股さん夫妻と談笑する小野室長(中央)。「集落のみんなが元気になっていくのがうれしい」昨年10月

70年ほど前まで地域に欠かせない食べ物として作られていた。各市町村が高齢化率

その味を収穫作業から再現できないか。活性化策として県職員らが協力。ようやく完成したワラビ粉を、集落を挙げて楽しめる

職員がわらび餅の本場京都の和菓子材料問屋に持ち込むと、意外な答えが返ってきた。とても質がいい。粉の不純物を改善できるなら粉を買い取らせてほしい。ワラビ粉販売が軌道に乗れば、集落を継ぐ人が現れるかもしれない。「家事以外の仕事が増えて忙しい。気持ちが増え返った」。猪股さんの妻節子さん(68)は生き生きとした表情で語った。

職員がわらび餅の本場京都の和菓子材料問屋に持ち込むと、意外な答えが返ってきた。とても質がいい。粉の不純物を改善できるなら粉を買い取らせてほしい。ワラビ粉販売が軌道に乗れば、集落を継ぐ人が現れるかもしれない。「家事以外の仕事が増えて忙しい。気持ちが増え返った」。猪股さんの妻節子さん(68)は生き生きとした表情で語った。

行政と現場 一人三脚

道もモデル事業

高知県は本年度、複数の集落の住民らで運営する「集落活動センター」の設置事業を始めた。廃校跡や集会所を拠点に買い物支援や特産品販売を行う。住民出資のガンリンスタンドの経営を目指す動きも出てきた。

県職員も頻りにセンタリーを訪ねて相談に乗る。10年間で130カ所を開設を目指す県は、限界を突破する知恵と熱意が試されている。